福島県内弥生時代後期の遺跡分布について（1）
浜通り地方

笠井　崇吉

1　はじめに

平成30年9月29日(土)から11月25日(日)まで開催した、まほろん指定文化財展「白河市天王山遺跡の時代」では、一般来館者とともに、県内外から多くの研究者を迎えることができた。これは偏に、東北地方南部の弥生時代後期の土器を考える際に根幹となる福島県指定重要文化財の「天王山遺跡出土品」の大半を公開することができたことに尽きるが、福島県の弥生時代後期をテーマにした展示を開催できたことは、当該期の研究に幾ばくかの刺激を与えることが出来たものと思われる。展示担当者として、共催いただいた白河市ならびに協力いただいた各氏、各機関、同僚に対してあらためて御礼を申し上げる。

さて、この企画展の展示パネルとして、福島県の弥生時代後期の遺跡分布図を作成した(図1)。この図は、平成12年に東日本埋蔵文化財研究会と福島県立博物館が主催して行われたシンポジウム「東日本弥生時代後期の土器編年」の資料集を基に、まほろん及び公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部・福島県立図書館の所蔵する発掘調査報告書及び各自治体史の記載事例を追加して作成したものである。その完成が企画展開幕に間に合わず、開催期間半ばの

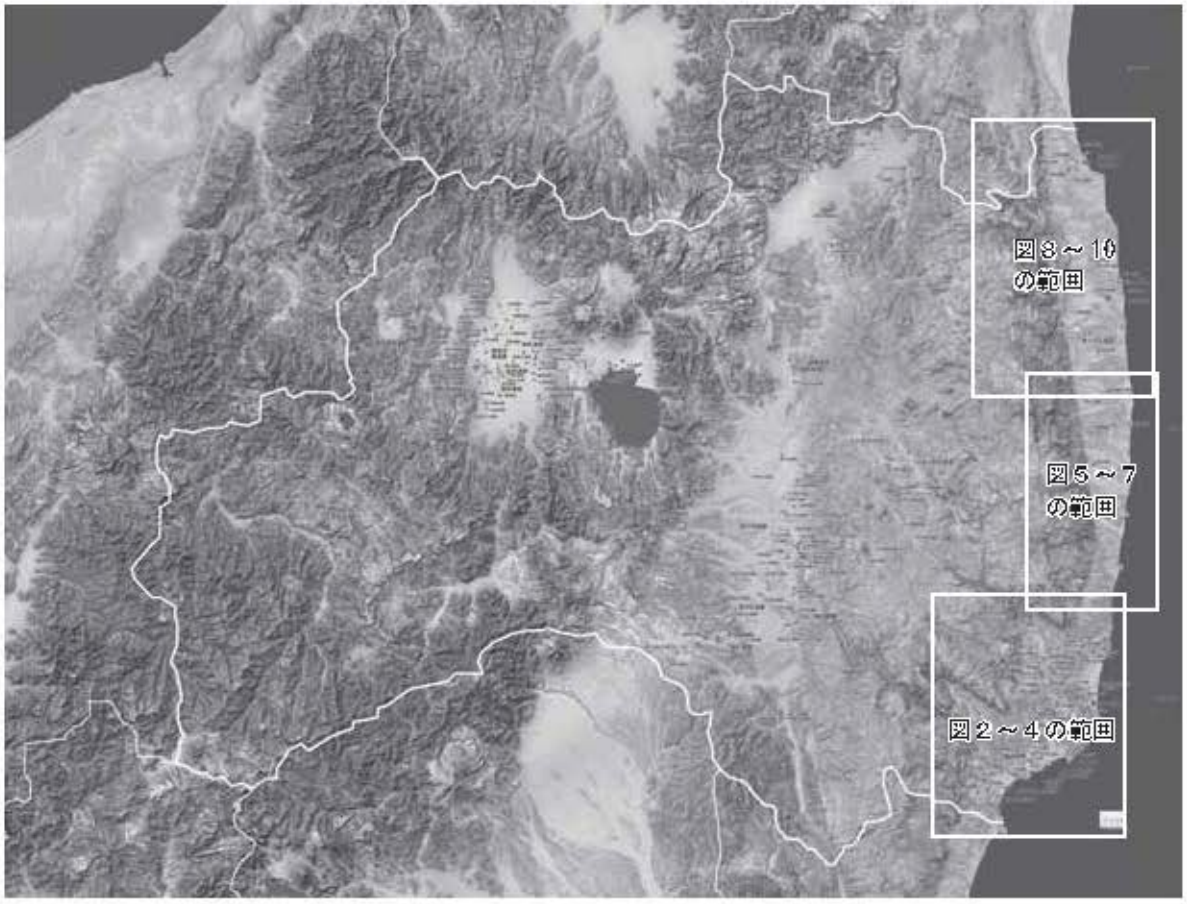


図1　福島県弥生時代後期土器出土遺跡分布図

11月になってようやく掲示できた経緯がある。本図を見ることのできなかった展示期間前半の来館者へのお詫びと、平成12年のシンポジウムから18年を経た県内の弥生時代後期遺跡の現況確認も兼ねて、本誌で分布図を公開することとしたい。なお、紙数の関係から、 全体を「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の３回に分け本稿では、（１）として「浜通り地方」を扱うこととする。

２　弥生時代後期土器の区分と分布図上の遺跡記号について

本稿では、分布図に付随して弥生時代後期の遺跡一覧を作成した。ここでは時期区分として便宜的に既存の土器型式名に対応した遺跡名を用いているが、少ない情報から強引に時期を認定している資料もあるため、本来の土器型式と定義がずれている部分がある。このため、本稿遺跡一覧での型式認定の基準を以下に明記する。

天王山　狭義の天王山式。地文は、縦走・横走させたＲＬ単節縄文が多く、付加条１種も一定数ある。地文のみで縦走・横走する縄文の場合は、本期に含めている。口縁部は、肥厚ないし複合口縁で、口縁部幅の狭いものとやや広いものがあるが、基本的に受口状を呈する。口縁部下端には、交互刺突文が区画文として施されることが多く、一部刺突列の例もある。口縁部の意匠文は、上開きの連弧文を基本とし、波状口縁の場合は波頂部にへの字形の三叉文が施される場合が多い。頸部は、地文のみか無文の場合が多い。肩部は、交互刺突文による区画文の中に対向する連弧文を配置するのが基本で、連弧文の間に楕円や菱形などの付加文が配置される。磨消縄文が多く、２条１組の沈線で描かれる場合と単沈線で描かれる場合とがあり、前者が古い要素と考えている。肩部と胴部の境には下開きの連弧文が単沈線で施される。胴部は地文のみである。浪江町上ノ原遺跡出土資料や南相馬市船沢Ａ遺跡出土資料を典型とする。

明　戸　狭義の天王山式に後続する土器群を代表させた。踏瀬大山式、屋敷式、八幡台遺跡の地文のみの一群も含む。地文は、天王山期にプラスして斜走する撚糸文が加わるため、地文のみで羽状をなさない場合は本期に含めた。口縁部は複合口縁が基本で、天王山に比べ薄く幅広になる傾向があり、受口状も認められるが直線ないし外反気味のものが多い。口縁部の意匠文は、単純な連弧文から三角文や楕円文に変化していく。交互刺突文は認められるが、対刺突や指頭押圧、円形竹簡刺突、刻み目等バラエティーが増える。刺突文が多段化する傾向も認められ、縦長の突起が付加されるものが増える。天王山期からかもしれないが、縄文原体の押圧文も認められる。頸部は、肩部の文様帯幅が広がるのに連動して、地文のみ及び無文部幅が狭いか無い場合が多い。肩部文様は、連弧文のモチーフが崩れて三角文や楕円文化しており、多段化する傾向がある。文様の基点に凹点文が施され、主文様の中に一本描きの波長の短い波状文が付加されるのも本期の特徴である。意匠文は基本的に単沈線で描かれ、磨消縄文は残るが、地文に沈線のみのものが多い。また、天王山期にも存在するが、意匠文の無い地文のみで、口縁部に刻みや指頭押圧を持つ一群が主体を成すのが本期の特徴と考えられる。いわき市横山古墳群１号住居跡出土資料を典型とする。

平窪諸荷　広義の天王山式系で弥生時代後期末の土器群を代表させている。地文は、羽状の

撚糸文で、意匠文はほとんど施されない。口縁部は、幅広の複合口縁を成し外反する。いわき市平窪諸荷遺跡４号方形周溝墓出土資料を典型とする。

伊勢林前　伊勢林前式。平行沈線文系土器。地文は付加条1種が多く胴部以下に施される。口縁部はラッパ状に開き、幅の狭い複合口縁の下端に棒状工具や縄文原体末端で刻みが加えられる。複合口縁の直下には、同様の刻みが施された隆帯が貼り付けられる場合も多い。頸部から肩部にかけては、無文地に二本同時施文具で重山形文・重連弧文・縦線文・斜格子文・波状文が施される。いわき市伊勢林前遺跡住居跡出土資料、同市上ノ内遺跡22号住居跡出土資料を典型とする。

輪　山　輪山式、東中根各式などの櫛描文系土器の古い段階を代表させた。施文原体及び意匠文施文部位、口縁部形態は、伊勢林前期と大差はないが、縄文原体の圧痕がなくなり、指頭圧痕が加わるとともに一部櫛描波状文が施されるものがある。頸部から肩部の意匠文モチーフもほぼ伊勢林前期のモチーフを踏襲するが、縦線文が区画文化したり、文様帯の区画文であった横線文が多段化する。また同心円文や１本描きの斜格子文が新たに加わる。大きな違いとしては、施文工具に３本以上の同時施文工具が使用されることである。意匠文を持たない地文のみのものがあり、天王山期・明戸期との区別がつきにくいが、口縁部に隆帯の貼付けが認められる場合は本期に含めた。いわき市輪山遺跡住居跡出土資料を典型とする。

十王台　八幡台式の櫛描文系土器群、十王台各式を代表させた。地文は付加条２種が主流になり、羽状構成をとるものが多い。地文の施文部位は口縁部及び胴部である。口縁部は、直線的に弱く開くものが多い。口縁部と頸部との境に刻みのある隆帯を２～３段付し、櫛描波状文を施すものと、口縁部全体に２～３段の隆帯を付したものがある。頸部から肩部にかけては、無文地に櫛状工具で縦スリット充填波状文を施すものが多く、横位の波状文のみのものも見られる。頸部と肩部波状文は、輪山期のものよりも波長が短く、鋸歯状に近いものもある。いわき市応時遺跡４号住居跡出土資料、同市夕日長者遺跡71号住居跡を典型とする。

本屋敷古墳群　櫛描文系土器群の最終段階を代表させた。口縁部は弱く外反し頸部との境に低い隆帯や２列の刺突文が巡る。地文は羽状の撚糸文である。浪江町本屋敷古墳群２号住居跡出土資料、いわき市上野遺跡表採資料を典型とする。

分布図の作成にあたっては、以上の時期区分に従って最大公約数的に前半と後半に分けて表示することとした。前半期は、伊勢林・輪山・天王山の時期、後半期は、明戸・十王台・平窪諸荷・本屋敷古墳群の時期に対応させた。遺跡記号の表記としては、記号の中央で上下に分割し、上側を前半期、下側を後半期とし、当該期の資料がある場合は白塗り、無い場合は黒塗りで表現した。また、土器群の系統について、広義の天王山式系の土器群（天王山・明戸・平窪諸荷）と平行沈線・櫛描文系の土器群（伊勢林前・輪山・十王台式・本屋敷古墳群）に分け、前者を○、後者を□で表記し、両者を含む場合は重ねて表記した。時期ごとの遺跡分布を比較するため、弥生時代中期後葉と古墳時代前期前葉の土器が出土した遺跡も別図に落とした。記号は、多条工具で意匠文を描く天神原式を▼、二条同時施文具で意匠文を描く桜井式を▲、柱状脚高杯登場以前の古式土師器が出土する古墳時代前期前葉の遺跡を◆で表記した。

3　いわき市域の弥生時代後期遺跡とその分布

いわき市域は、福島県において弥生時代後期の遺跡調査数が会津盆地とともに多い地域であり55遺跡(註1)を確認できた。図2は地形図にそれらの遺跡の位置を落とした分布図である。この図で見ると、弥生時代後期の遺跡は、勿来低地の周辺部、小名浜低地の周辺部、夏井川下流域右岸及び滑津川流域の丘陵地、夏井川中流域及び好間川・新川流域の丘陵地、仁井田川中・下流域の丘陵地にいくつかのまとまりをもって分布している。南部の勿来低地周辺部から順に北上しつつ、遺跡立地と分布、出土する土器群の特徴を概観していく。

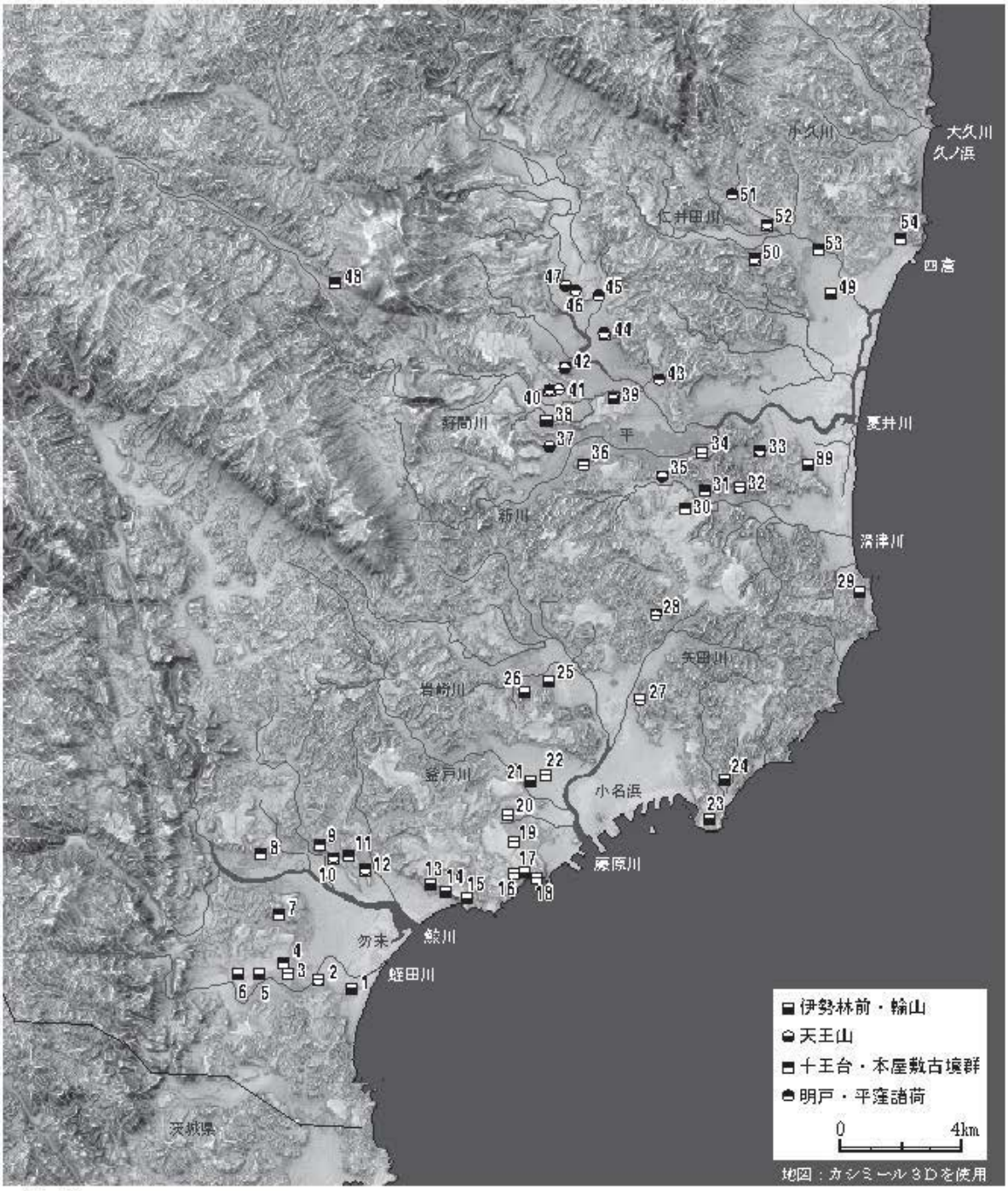
蛭田川流域には、伊勢林前遺跡（1）、上ノ内遺跡（2）、郡遺跡（3）、応時遺跡（4）、北境遺跡（5）、白米中坪Ｂ遺跡（6）の６遺跡が確認でき、標高16～39ｍ、近隣の沖積地からの比高差10～15ｍ程度の丘陵及び低位段丘上に占地しており、基本的に沖積地を見下ろす場所に位置している。この内、上の内遺跡・郡遺跡は、後期を通して土器が出土しており、伊勢林前遺跡・北境遺跡・白米中坪Ｂ遺跡が後期前半、応時遺跡が後期後半の土器が出土している。出土する土器は、いずれも平行沈線・櫛描文系の土器群で、上ノ内遺跡でのみ後期後半の明戸式が伴う。海岸部に近い伊勢林前遺跡・上ノ内遺跡では、伊勢林前式が出土している。

鮫川下流域では、左岸の低位段丘や丘陵頂部に井上遺跡（8）、仁井田町辰ノ口遺跡（9）、後田遺跡(10)、小名田遺跡(11)、八幡台遺跡(12)、小原遺跡(13)、輪山遺跡(14)、小浜町台遺跡(15)の８遺跡が確認できる。いずれも沖積地に面した高台に立地しており、遺跡の標高は、18～59ｍと開きがある。近隣沖積地からの比高差は、６ｍの井上遺跡、15～20ｍ程度の後田遺跡、小名田遺跡、八幡台遺跡、30～50ｍ程度の仁井田町辰ノ口遺跡、小原遺跡、輪山遺跡、小浜町台遺跡に分かれ、比高差の少ない井上遺跡では、無文地の土器を含む弥生時代最終末期の土器が出土している。また、比高差の大きな遺跡は、輪山式が出土する傾向がある。出土土器は、平行沈線・櫛描文系の土器群で、海岸に近い小原遺跡・輪山遺跡・小浜町台遺跡では、後期前半の土器群が、低地奥部の井上遺跡、仁井田町辰ノ口遺跡、後田遺跡、小名田遺跡、八幡台遺跡では、後期後半の土器群が出土している。後田遺跡・八幡台遺跡では、後期後半の天王山式系の土器が伴う。

鮫川下流域右岸では、蛭田川流域との中間の丘陵地に長子遺跡（7）が所在する。十王台式の片口壺が出土している遺跡で、沖積地に面しておらず、丘陵部を樹枝状に削る谷地に向かう斜面部に立地し、標高20ｍ程度、谷底低地からの比高差10ｍ程度である。

小名浜低地の西縁、釜戸川・藤原川下流右岸の標高40～50ｍの丘陵上には、須賀蛭Ａ遺跡(16)(註2)、大畑貝塚(17)、大畑Ｅ遺跡(18)、朝日長者遺跡(19)、夕日長者遺跡(20)の５遺跡が所在する。近隣の沖積地との比高差は、大畑貝塚が20ｍ程度であるのを除くと30～45ｍと比較的大きい。いずれの遺跡も、平行沈線・櫛描文土器系の土器群が出土し、輪山期のみの大畑貝塚以外は、後期前半と後半の土器群が出土している。特に朝日長者遺跡・夕日長者遺跡では、伊勢林前～十王台式まで継続して土器が出土する。

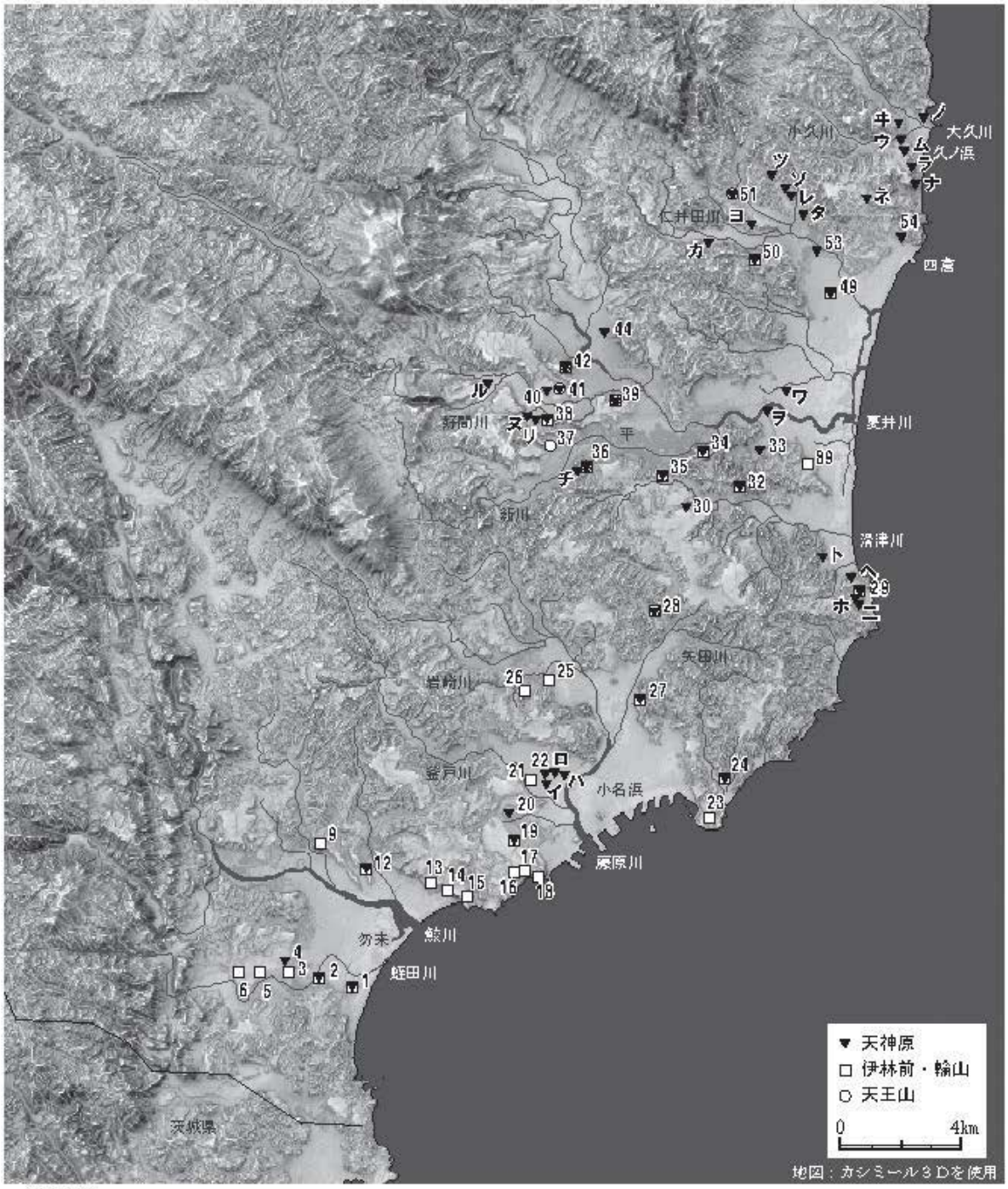
藤原川と釜戸川の合流点北側の低地部には、泉城跡(21)、菅俣Ｂ遺跡(22)の２遺跡が所在す



遺跡名

1.伊勢林前　2.上ノ内　3.郡　4.応時　5.北境　6.白米中坪B　7.長子　8.井上
9.仁井田町辰ノ口　10.後田　11.小名田　12.八幡台　13.小原　14.輪山　15.小浜町台
16.須賀蛭A　17.大畑貝塚　18.大畑E　19.朝日長者　20.夕日長者　21.泉城跡　22.菅俣B
23.綱取貝塚　24.千速A　25.山ノ根台　26.登館跡　27.相子島貝塚　28. 四郎作　29.薄磯貝塚
30.中山館跡　31.小山　32.植田郷B　33.砂畑　34.白土城跡　35.龍門寺　36.久世原館・番匠地
37.萩田　38.向山　39.桜町　40.上野　41.菊竹　42.愛谷　43.中塩　44.平窪諸荷　45.酢釜平
46.横山古墳群　47.横山B　48.中山B　49.古川　50.水品　51.タタラ山　52.玉山古墳
53.戸田条里　54.地引洞窟　89.根岸

図２　いわき市域弥生時代後期土器出土遺跡分布



遺跡名

1.伊勢林前　2.上ノ内　3.郡　4.応時　5.北境　6.白米中坪B　9.仁井田町辰ノ口　12.八幡台
13.小原　14.輪山　15.小浜町台　16.須賀蛭A　17.大畑貝塚　18.大畑E　19.朝日長者
20.夕日長者　21.泉城跡　22.菅俣B　23.綱取貝塚　24.千速A　25.山ノ根台　26.登館跡
27.相子島貝塚　28.四郎作　29.薄磯貝塚　30.中山　32.植田郷B　33.砂畑　34.白土城跡
35.龍門寺　36.久世原館・番匠地　37.萩田　38.向山　39.桜町　40.上野　41.菊竹　42.愛谷
44.平窪諸荷　49.古川　50.水品　51.タタラ山　53.戸田条里　54.地引洞窟　89.根岸
イ.泉町C　ロ.折返A　ハ.神力前B　二.薄磯大平　ホ.三反田C　ヘ.代ノ下B　ト.越巻
チ.清水　リ.寺台　ヌ.石坂　ル.稲荷原　ヲ.小茶円　ワ.内宿　カ.和具C　ヨ.玉山　タ.永田
レ.白岩堀ノ内館跡　ソ.白岩堀ノ内　ツ.大猿田　ネ.栗木作　ナ.静　ラ.前上ノ山　ム.犬松沢
ウ.連郷　キ.大場C　ノ.磐出館跡

図３　いわき市域弥生時代中期後葉～後期前半土器出土遺跡分布

遺跡名

2.上ノ内　3.郡　4. 応時　7.長子　8.井上　9.仁井田町辰ノ口　10.後田　11.小名田
12.八幡台　16.須賀蛭A　18.大畑E　19.朝日長者　20.夕日長者　22.菅俣B　28. 四郎作
30.中山館跡　31.小山　32.植田郷B　33.砂畑　34.白土城跡　36.久世原館・番匠地　39.桜町
40.上野　41.菊竹　43.中塩　44.平窪諸荷　45.酢釜平　46.横山古墳群　48.中山B　50.水品
51.タタラ山　52.玉山古墳　53.戸田条里　54.地引洞窟
a.館跡遺跡　b.泉町C　c.折返A　d.神力前B　e.内宿　f.中里(原高野)

図４　いわき市域弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉土器出土遺跡分布

る。両遺跡とも標高４ｍの浜堤上に立地し、平行沈線・櫛描文系の土器群が出土している。泉城跡は輪山式、菅俣Ｂ遺跡では、輪山式と十王台式が出土している。

小名浜低地の東側の海岸に面した段丘上には、綱取貝塚(23)、千速Ａ遺跡(24)が所在する。標高は、頂部付近に位置する綱取貝塚が45ｍと高く、谷に面した斜面に立地する千速Ａ遺跡では17ｍを測る。沖積地との比高差は、綱取貝塚で40ｍ、千速Ａ遺跡で12ｍである。両遺とも後期前半の平行沈線・櫛描文系の土器群が出土している。

小名浜低地の北西部では、岩崎川右岸の丘陵地上に、山ノ根台遺跡(25)と登館跡(26)が所在する。山ノ根台遺跡は標高20ｍ、沖積地との比高差13ｍ、登館跡は、標高46ｍ、沖積地との比高差40ｍの丘陵頂部に立地する。両遺跡ともに、伊勢林前式・輪山式が出土している。

小名浜低地の北東部では、矢田川流域の丘陵地に、相子島貝塚(27)、四郎作遺跡(28)が所在する。相子島貝塚が矢田川左岸、四郎作遺跡が矢田川右岸の丘陵裾部斜面に立地する。小名浜低地の最奥部にあたる両遺跡からは、後期前半の段階で輪山式が出土しているが、後期後半になると天王山式系の明戸式が主体となる。小名浜低地周辺部では、矢田川流域のみが天王山式系の土器群を持つ集団ということになり、進出時期は、四郎作遺跡出土資料から、後期前半の天王山式期に遡る可能性がある。

滑津川下流右岸の海岸近くの丘陵部には、薄磯貝塚(29)が所在する。丘陵裾部の斜面から伊勢林前式の土器片が少量出土している。

夏井川下流と滑津川中流に挟まれた丘陵地帯には、植田郷Ｂ遺跡(32)、小山遺跡(31)、龍門寺遺跡(35)、白土城跡(34)、砂畑遺跡(33)、根岸遺跡(89)、滑津川右岸には、中山館跡(30)が所在する。この内、植田郷Ｂ遺跡・小山遺跡・龍門寺遺跡・白土城跡は、標高30～75ｍ、近隣の沖積地との比高差10～30ｍ程度の丘陵・段丘の頂部及び中腹斜面に立地する。夏井川側の砂畑遺跡・根岸遺跡は、谷底及び浜堤上に立地し、沖積地との比高差はほぼ無い。また、滑津川右岸の中山館跡は、狭隘な沖積地に立地する。植田郷Ｂ遺跡・龍門寺遺跡・白土城跡・根岸遺跡で後期前半の輪山式が出土しており、龍門寺遺跡では天王山式も出土している。後期後半は、小山遺跡・砂畑遺跡・白土城跡・中山館跡で十王台式が確認できる他、植田郷Ｂ遺跡・砂畑遺跡では明戸式が出土している。この地域は、平行沈線・櫛描文土器群と天王山式系の土器群を持つ集団がモザイク状に分布したようである。

新川・好間川流域と夏井川中流右岸の丘陵地には、久世原館・番匠地遺跡(36)、萩田遺跡(37)、向山遺跡(38)、桜町遺跡(39)、上野遺跡(40)、菊竹遺跡(41)、愛谷遺跡(42)の７遺跡が所在する。この内、萩田遺跡・向山遺跡・桜町遺跡は、標高20～30ｍ程度の丘陵中腹の緩斜面に立地し、近隣の沖積地との比高差は10ｍ程度である。上野遺跡・菊竹遺跡・愛谷遺跡は、標高50～80ｍ、比高差30～50ｍ程度の段丘及び丘陵頂部に立地している。新川右岸の久世原館・番匠地遺跡のみ丘陵裾部の斜面から谷底低地に立地している。平行沈線・櫛描文系の土器群が出土する遺跡は、、伊勢林前式が久世原館・番匠地遺跡と向山遺跡で、輪山式が久世原館・番匠地遺跡・桜町遺跡であり、後期後半の十王台式は確認できない。対して天王山式系の土器群は、後期前半の天王山式が久世原館・番匠地遺跡・萩田遺跡・桜町遺跡・菊竹遺跡・愛谷遺跡で、後期後

表１　福島県弥生時代後期遺跡一覧（いわき市域１）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
1	伊勢林前遺跡	いわき市 勿来町 四沢伊勢 林前	丘陵 頂部 平坦面	16～ 22m	10m	集落跡。住居跡４軒（伊勢林前３、輪山１）検出。	いわき市教育委員会　1972『伊勢林前遺跡』 いわき市教育委員会　1976『伊勢林前遺跡Ｂ地区』
2	上ノ内遺跡	いわき市 勿来町 四沢上ノ内	段丘 頂部 平坦面	22m	16m	集落跡。住居跡９軒（伊勢林前式２、十王台式7）、明戸。アメ鏃・紡錘車出土。	㈶いわき市教育文化事業団　1996『綱取貝塚』 いわき市教育委員会
3	郡遺跡	いわき市 勿来町 窪田字郡	丘陵 裾部 微高地	19～ 25m	10m	散布地。Ａ・Ｄ・Ｅ地点から土器片（輪山・十王台）出土。	いわき市教育委員会　1985『郡遺跡範囲確認調査報告書』
4	応時遺跡	いわき市 勿来町 大高応時	丘陵 裾部 微高地	18m	9m	集落跡。住居跡１軒（十王台）、包含層。匙状土製品出土。	㈶いわき市教育文化事業団　2006『応時遺跡』 いわき市教育委員会
5	北境遺跡	いわき市 勿来町 酒井北境	台地 頂部 平坦面	33m	8m	集落跡？土坑１基（輪山）。	㈶いわき市教育文化事業団　2017『北境遺跡　酒井酒井原遺跡　泉城下町遺跡』 いわき市教育委員会
6	白米中坪Ｂ遺跡	いわき市 勿来町 白米中坪	段丘 頂部 平坦面	36～ 39m	15m	散布地。土器片（輪山）出土。	㈶いわき市教育文化事業団　1987『白米中坪Ａ・Ｂ遺跡』 いわき市教育委員会
7	長子遺跡	いわき市 錦町中ノ町	丘陵 中腹 斜面	20～ 30m	10m	散布地。壺（十王台）出土。	渡辺　誠　1961「石城地方における弥生式土器（Ｉ）　十王台式土器の北限について」『磐城考古』第18号
8	井上遺跡	いわき市 山田町 井上	低位 段丘 斜面	18m	8m	集落跡・土坑３基、包含層？（十王台・本屋敷古墳群）。	㈶いわき市教育文化事業団　2009『井上遺跡』 いわき市教育委員会
9	仁井田町 辰ノ口遺跡	いわき市 仁井田町 辰ノ口	台地 頂部 平坦面	53m	30m	集落跡？土器（十王台）が多数出土。	いわき市 1976『いわき市史』第八巻　原始・古代・中世資料
10	後田遺跡	いわき市後田町源道平	丘陵頂部平坦面	27m	15m	散布地。土器片（明戸・十王台）少数出土。	㈶いわき市教育文化事業団　2017『後田遺跡　後田古墳群』　いわき市教育委員会
11	小名田遺跡	いわき市 植田町 小名田	丘陵 頂部 斜面	30m	20m	集落跡？遺存度の高い壺（十王台）出土。	馬目順一　1966「いわき市勿来・小名田遺跡発見の十王台式直前の土器について」『磐城考古』第25号
12	八幡台遺跡	いわき市 植田町 八幡台	丘陵 頂部 平坦面	23m	16m	集落跡。住居跡４軒（十王台）、紡錘車出土。	㈶いわき市教育文化事業団　1980『八幡台遺跡』 いわき市教育委員会
13	小原遺跡	いわき市 岩間町 上山	台地 頂部 平坦面	59m	50m	集落跡？包含層（輪山）。	㈶いわき市教育文化事業団　2008『小原遺跡』 いわき市教育委員会

表１　福島県弥生時代後期遺跡一覧（いわき市域２）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
14	輪山遺跡	いわき市小浜町字輪山	段丘頂部平坦面	56m	52m	集落跡。住居跡３軒（輪山）。	いわき市教育委員会　1977『輪山遺跡』
15	小浜町台遺跡	いわき市小浜町台	海岸丘陵頂部平坦面	40m	35m	散布地。土器片（輪山）少量出土。	いわき市 1976『いわき市史』第八巻　原始・古代・中世資料
16	須賀蛭Ａ遺跡	いわき市泉町下川字須賀蛭	丘陵頂部平坦面	40～50m	30m	集落跡？。土器片（伊勢林前・輪山・十王台）多数表採。	中村五郎 田中敏 2015「いわき市須賀蛭遺跡の弥生土器と東日本の天王山式から布留式までの間の変動(1)」『福島県立博物館研究紀要』第 29 号
17	大畑貝塚	いわき市泉町下川字大畑	台地頂部平坦面	52～53m	20m	集落跡。Ｇ地点に住居跡２軒（輪山）。	いわき市教育委員会　1975『大畑貝塚調査報告』
18	大畑E遺跡	いわき市泉町下川字大剣	丘陵頂部平坦面	40～42m	33m	集落跡？包含層（輪山・十王台）。アメ鏃出土。	㈶いわき市教育文化事業団 1990『大畑E遺跡』いわき市教育委員会
19	朝日長者遺跡	いわき市泉町下川字中ノ谷	丘陵頂部平坦面	43～51m	37m	集落跡。住居跡 12 軒（伊勢林前 3、輪山 3、十王台 6）包含層。アメ鏃・紡錘車・環状石斧出土。	いわき市教育委員会 1981『朝日長者遺跡　夕日長者遺跡』
20	夕日長者遺跡	いわき市泉町下川字土木内	丘陵頂部平坦面	48～49m	45m	集落跡。住居跡３軒（十王台）、包含層（伊勢林前～十王台）紡錘車出土。	いわき市教育委員会 1981『朝日長者遺跡　夕日長者遺跡』
21	泉城跡	いわき市泉町四丁目	浜堤上	4m	0m	散布地。土器片（輪山）少量。	㈶いわき市教育文化事業団 1992『泉城跡』いわき市教育委員会
22	菅俣Ｂ遺跡	いわき市泉町滝尻字菅俣	浜堤上	4m	0～1m	散布地。包含層（輪山・十王台）。	㈶いわき市教育文化事業団 2003『折返Ａ遺跡・菅俣Ｂ遺跡』いわき市教育委員会
23	綱取貝塚	いわき市小名浜下神白字大作	海岸段丘頂部	45m	40m	集落跡。住居跡２軒（輪山）。	㈶いわき市教育文化事業団 1996『綱取貝塚』いわき市教育委員会
24	千速Ａ遺跡	いわき市小名浜下神白字千速	段丘斜面	16～18m	12m	散布地。遺物包含層（伊勢林前）。	㈶いわき市教育文化事業団 2001『千速A遺跡』いわき市教育委員会
25	山ノ根台遺跡	いわき市常盤岩ヶ岡町山ノ根・台	丘陵頂部平坦面	20m	13m	集落跡？土器片（伊勢林前・輪山）、紡錘車出土。	いわき市 1976『いわき市史』第八巻　原始・古代・中世資料
26	登館跡	いわき市常盤長孫町八幡平	丘陵頂部平坦面	46m	40m	集落跡？包含層（伊勢林前・輪山）。	㈶いわき市教育文化事業団 1997『登館跡』いわき市教育委員会

表１　福島県弥生時代後期遺跡一覧（いわき市域３）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
27	相子島貝塚	いわき市小名浜相子島字越巻	丘陵裾部緩斜面	2～6m	0m	遺物包含層（輪山・明戸）。	㈶いわき市教育文化財団 1997『相子島貝塚』いわき市教育委員会
28	四郎作遺跡	いわき市鹿島町字米田	丘陵裾部緩斜面	13～15m	3m	遺物包含層（輪山・天王山・明戸・十王台）。	㈶いわき市教育文化財団 1983『四郎作遺跡』いわき市教育委員会
29	薄磯貝塚	いわき市平薄磯字北街・三反田	丘陵裾部斜面	4～20m	0m	土器片（伊勢林前）少量、アメ鏃出土。	㈶いわき市教育文化財団 2004『薄磯貝塚（三反田Ｂ跡）』 2014『震災復興土地区画整理事業地内試掘調査報告２（薄磯地区）』 いわき市教育委員会
30	中山館跡	いわき市平中山字矢ノ倉	沖積地	17m	0m	土器片（十王台）1点出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2000『中山館跡Ⅰ区』 いわき市教育委員会
31	小山遺跡	いわき市平中山字小山	丘陵頂部付近斜面	35～65m	23m	土器片（十王台）少量出土。	㈶いわき市教育文化財団 1994『小山遺跡』 いわき市教育委員会
32	植田郷B遺跡	いわき市平上高久字植田郷	段丘頂部斜面	34～61 m	25m	包含層（輪山・明戸・北陸系）。紡錘車出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2002『植田郷B遺跡』 いわき市教育委員会
33	砂畑遺跡	いわき市平菅波字砂畑・荒屋敷	浜堤上	5 m	1m	集落跡？土坑１基（十王台）、包含層（明戸・十王台）。独鈷石出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2002『荒田目条里制遺構・砂畑遺跡』いわき市教育委員会
34	白土城跡	いわき市平南白土字舘岸・竜沢	丘陵頂部付近	45～75m	28m	包含層（輪山・十王台）。	㈶いわき市教育文化財団 2006『白土城跡』 2008『白土城跡』 いわき市教育委員会
35	龍門寺遺跡	いわき市平下荒川字諏訪下	丘陵裾部斜面	30m	10m	包含層（輪山・天王山）。独鈷石出土。	㈶いわき市教育文化財団 1985『龍門寺遺跡』いわき市教育委員会
36	久世原館・番匠地遺跡	いわき市内郷御厩町久世原・番匠地	丘陵斜面から谷底低地	15～48 m	0m	包含層（伊勢林前・輪山・天王山・明戸）。アメ鏃出土。	㈶いわき市教育文化財団 1989『久世原館・番匠地遺跡』 1989『久世原館』 1991『久世原館』 1993『久世原館・番匠地遺跡』 いわき市教育委員会
37	萩田遺跡	いわき市内郷高坂町おさヶ作	丘陵中腹斜面	20m	12m	土器片（天王山）出土。	日本国有鉄道水戸鉄道管理局 1965『福島県内郷萩田遺跡発掘調査報告書』
38	向山遺跡	いわき市好間町下好間字向山	丘陵中腹斜面	22～30 m	6m	包含層（伊勢林前）。環状石斧・有角石斧出土。	㈶いわき市教育文化事業団 1986『向山遺跡』 いわき市教育委員会

表１　福島県弥生時代後期遺跡一覧（いわき市域４）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
39	桜町遺跡	いわき市平字桜町・胡摩沢	丘陵中腹緩斜面	26～31m	10m	集落跡？包含層（輪山・天王山）。独鈷石出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2002『桜町遺跡』いわき市教育委員会
40	上野遺跡	いわき市好間町北好間字上野	段丘頂部平坦面	50m	33m	集落跡・墓跡？包含層（明戸・本屋敷古墳群）。	㈶いわき市教育文化事業団 2007『根小屋遺跡　上野遺跡』2016『上野遺跡』いわき市教育委員会
41	菊竹遺跡	いわき市好間町小谷作字竹ノ内	段丘頂部緩斜面	48～50m	28m	包含層（天王山・明戸）。	㈶いわき市教育文化事業団 2005『菊竹遺跡』いわき市教育委員会
42	愛谷遺跡	いわき市好間町愛谷字大平他	丘陵頂部付近緩斜面	65～88m	52m	集落跡。住居跡１軒（天王山）、包含層（輪山・天王山）。	㈶いわき市教育文化事業団 1985『愛谷遺跡』いわき市教育委員会
43	中塩遺跡	いわき市平中塩字一水口	低位段丘上	10m	0m	散布地。土器片（明戸）出土。	いわき市 1976『いわき市史』第八巻　原始・古代・中世資料
44	平窪諸荷遺跡	いわき市平下平窪字諸荷	丘陵頂部から斜面	20～38m	6m	墓跡。方形周溝墓４基（平窪諸荷）、包含層（明戸・十王台・平窪諸荷・北陸系）。鉄針出土。	㈶いわき市教育文化事業団 1998『平窪諸荷遺跡』いわき市教育委員会
45	酢釜平遺跡	いわき市平上平窪字酢釜平	丘陵頂部付近	30～40m	15m	散布地。土器片（明戸）表採。	樫村友延　1985「福島県いわき市平酢釜平遺跡採取の天王山式土器」『東洋文化研究』第４号
46	横山古墳群（富岡遺跡）	いわき市平上平窪字富岡・字横山	丘陵頂部付近	44～46m	36m	集落跡。住居跡１軒（明戸式）、ピット１基。紡錘車・匙状土製品出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2001『横山古墳群B　金波遺跡・北ノ作B遺跡』2002『横山古墳群』いわき市教育委員会
47	横山Ｂ遺跡	いわき市平下平窪字横山	丘陵頂部付近	52m	24m	包含層（天王山）。	㈶いわき市教育文化事業団 2001『横山Ｂ遺跡』いわき市教育委員会
48	中山Ｂ遺跡	いわき市三和町合戸字中山	岸段丘斜面	329～333m	30m	包含層（十王台）	㈶いわき市教育文化事業団 2004『中山Ｂ遺跡』いわき市教育委員会
49	古川遺跡	いわき市四倉町狐塚字古川	浜堤上	4ｍ	0m	土器片（輪山）少量出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2013『古川遺跡』いわき市教育委員会
50	水品遺跡	いわき市平水品字根岸・カキ田・荒神平	丘陵頂部緩斜面	43～50m	24m	集落跡。住居跡２軒（明戸・十王台）。紡錘車、アメ鏃出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2007『水品遺跡』2010『水品遺跡』2015『水品遺跡3』いわき市教育委員会

表１　福島県弥生時代後期遺跡一覧（いわき市域５）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
51	タタラ山遺跡	いわき市四倉町玉山字小高倉・勝倉	丘陵頂部尾根筋	73m	41m	Ⅱ区のみで土器片（明戸）出土。	㈶福島県文化センター 1995『常磐自動車道遺跡調査報告4』福島県教育委員会
52	玉山古墳	いわき市四倉町玉山字林崎	丘陵頂部平坦面	38～40m	25m	集落跡。住居跡１軒（詳細不明）、包含層（明戸・十王台・北陸系）。紡錘車出土。	㈶いわき市教育文化事業団 2009『玉山古墳』いわき市教育委員会
53	戸田条里遺跡	いわき市四倉町戸田	後背湿地	5～7m	0m	散布地。土器片（十王台）、アメ鏃出土。	㈶いわき市教育文化事業団 1991『戸田条里遺跡』いわき市教育委員会
54	地引洞窟	いわき市四倉町字五丁目	丘陵裾部崖面	6～10m	1m	洞窟遺跡。土器片（十王台）出土。	渡辺誠 1962「福島県四倉町発見の洞窟遺跡」『考古学雑誌』第48号第１号 日本考古学会
89	根岸遺跡	いわき市平下大越字根岸	丘陵裾の沢部	24m	0m	土器片（輪山）出土。	猪狩忠雄 2000「福島県」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会

※アメリカ式石鏃は、「アメ鏃」と略して表記している。

半の明戸式が久世原館・番匠地遺跡・上野遺跡・菊竹遺跡で確認でき、天王山式系の土器群が、後期前半段階から広がり、後半では完全に主体を占めている。

夏井川中流左岸の丘陵地には、中塩遺跡(43)、平窪諸荷遺跡(44)、酢釜平遺跡(45)、横山古墳群(46)、横山Ｂ遺跡(47)の５遺跡が所在する。遺跡の標高は、下流側の中塩遺跡の10ｍから次第に高さを増し、上流側の横山Ｂ遺跡では、52ｍを測る。近隣の沖積地からの比高差もほぼ標高に比例し、低位段丘上に立地する中塩遺跡ではほぼ０ｍ、平窪諸荷遺跡で６ｍ、最も比高差の大きい横山古墳群では36ｍを測る。この地域も天王山式系の土器群が主体を占めており、横山Ｂ遺跡で天王山式、中塩遺跡・平窪諸荷遺跡・酢釜平遺跡・横山古墳群で明戸式が出土している。平行沈線・櫛描文系土器群は、平窪諸荷遺跡で、十王台式土器が出土しているだけである。

いわき市北部の仁井田川中・下流域では、標高４～７ｍの沖積地に古川遺跡(49)、戸田条里遺跡(53)が立地し、丘陵地に水品遺跡(50)、タタラ山遺跡(51)、玉山古墳(52)、地引洞窟(54)の４遺跡が立地する。丘陵地の遺跡は、海浜部の地引洞窟が裾部にあることから、標高10ｍ程度、丘陵頂部に位置する水品遺跡・玉山古墳で40ｍ程度、タタラ山遺跡では、73ｍを測り、沖積地との比高差は、水品遺跡・玉山古墳で25ｍ程度、タタラ山遺跡で40ｍ程度である。この地域で弥生時代後期前半期の土器が確認されている遺跡は、輪山式が出土した古川遺跡だけである。後期後半では、平行沈線・櫛描文系土器群は、地引洞窟・戸田条里遺跡・水品遺跡・玉山古墳で十王台式が出土しており、天王山式系は、水品遺跡・玉山古墳・タタラ山遺跡で明

戸式が出土している。

この他、好間川上流の山間地に、中山Ｂ遺跡(48)が所在する。標高330ｍの段丘上に立地し、十王台式が出土している。

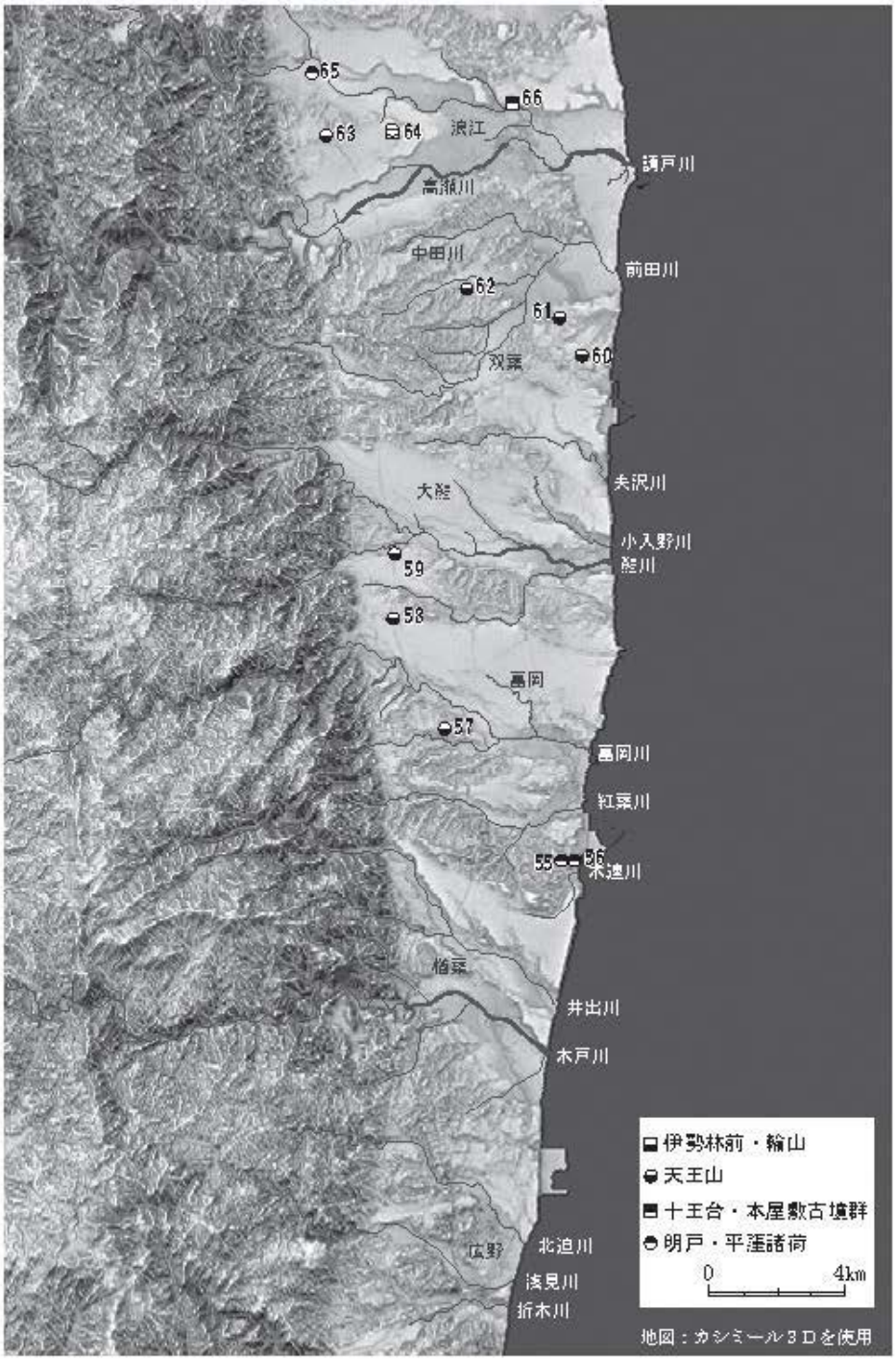
次に図３によりいわき市域の弥生時代中期後葉の遺跡と後期前半の遺跡の分布を見ていく。いわき市域で中期後葉の土器が出土する遺跡は、53遺跡ですべて天神原式が出土している。後期前半の遺跡が35遺跡であることから、中期から後期にかけて３割以上減少しており、後期前半の時期が複数の土器型式を含むことを考え合わせると遺跡の減少は明確である。中期後葉の遺跡分布は、平行沈線・櫛描文系の土器群が主体となる勿来低地周辺や小名浜低地西側では10遺跡と希薄で、天王山式系の土器群が優勢となる小名浜低地東側から夏井川中・下流域や後期前半の遺跡が少ない仁井田川中下流域、後期の遺跡が分布しない久之浜周辺に多い傾向がある。天神原式と伊勢林前式・輪山式が概ね分布を異にする状況と、その境目の地域に天王山式系の土器群が展開する状況は、いわき市域における弥生時代中期から後期へ流れを解明する上で、各土器型式の年代観も含め、今後より細かい出土状況の分析が必要である。

弥生時代後期後半と古墳時代前期前葉の遺跡の分布については、図４で示す。弥生時代後期後半が33遺跡で古墳時代前期前葉が16遺跡であるから、古墳時代の遺跡が半減しているように見えるが、弥生時代後期後半は土器型式にして古墳時代前期前葉の３～４型式分を含んでいることから、弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけての遺跡数はあまり変化が無いものと考えられる。十王台式が主体となる勿来低地周辺及び小名浜低地西側では、弥生時代後期後半の遺跡と古墳時代前期前葉の遺跡が重なる場合が多く、また小名浜低地では、藤原川と釜戸川の合流点付近の浜堤上に豪族居館の菅俣Ｂ遺跡を中心とした遺跡が集中する。明戸式等の天王山系の土器群が主体となる夏井川流域の諸遺跡では、古墳時代前期前葉の遺跡が重なることなく、古墳時代の遺跡は夏井川下流左岸の沖積地に進出する。また、植田郷Ｂ遺跡や平窪諸荷遺跡、矢田川流域の玉山古墳では、北陸系の土器群が出土しており、特に玉山古墳では、次の段階で東北地方でも屈指の規模を誇る前方後円墳が登場するため、北陸系の土器群と在地の弥生時代最終末の土器群そして塩釜・五領系の土器群の関係解明が今後の課題となろう。

４　双葉郡域の弥生時代後期遺跡とその分布

いわき市と南相馬市の間に位置する双葉群域は、いわき市域と比べると弥生時代後期の遺跡数が極端に減少し、12遺跡を確認しただけである。もちろん双葉郡内は、いわき市域ほど開発が進んでおらず、遺跡の発掘調査事例が少ないことも要因ではあるが、阿武隈高地から海岸線までの幅が狭く、比高差の大きい段丘や丘陵が続く地形的な特徴が弥生時代後期の人々の定着を阻害した可能性も否定できない。以下南から順に弥生時代後期の遺跡分布を概観していく。

いわき市域以北で弥生時代後期の遺跡が確認できるのは、楢葉町の北部、木連川と紅葉川に挟まれた丘陵地においてである。海岸線がほど近い狭隘な谷に面した頂部に北向遺跡(55)、波鏡院遺跡(56)が所在する。波鏡院遺跡は詳細が不明であるが、北向遺跡は、標高46ｍ、眼下の沖積地との比高差35ｍを測る。両遺跡は同一丘陵の頂部にならんでおり、後期後半の明戸



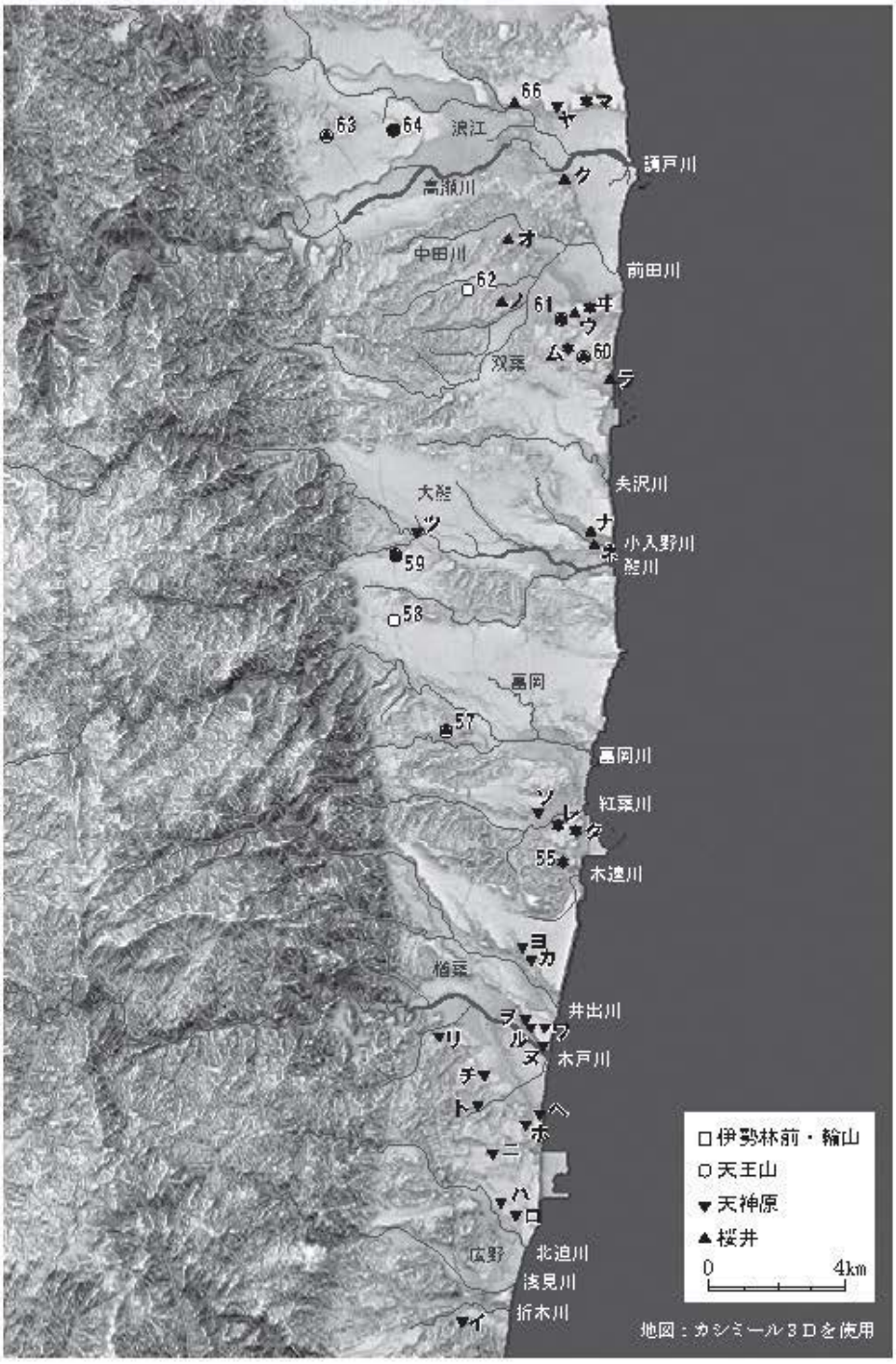
遺跡名
55. 北向
56. 波鏡院
57. 本町西A
58. 後作A
59. 道平
60. 楢無
61. 西原B
62. 南迫
63. 朴迫C
64. 上ノ原
65. 原B
66. 本屋敷古墳群

図５　双葉郡域の弥生時代後期土器出土遺跡分布

式が出土している。

富岡町域では、本町西Ａ遺跡(57)と後作Ａ遺跡(58)の２遺跡がある。本町西Ａ遺跡は、富岡川中流右岸の標高50ｍ程度沖積地からの比高差20ｍを測る段丘頂部に立地しており、天王山式と考えられる土器の小片が出土している。後作Ａ遺跡は、阿武隈高地東縁に近い富岡川中流左岸の段丘頂部から斜面に位置する。標高は80ｍを超えるが、下位の段丘面との比高差は10ｍ程度である。天王山式と考えられる横走・縦走縄文が施された土器片が出土している。

大熊町域では、道平遺跡(59)が知られる。阿武隈高地の東縁に近い大熊川支流の大河原川左



遺跡名
55. 北向
57. 本町西A
58. 後作A
59. 道平
60. 楢無
61. 西原B
62. 南迫
63. 朴迫C
64. 上ノ原
66. 本屋敷古墳群
イ.折木
ロ. 東町Ⅴ
ハ. 代Ⅰ
ニ. 岩沢
ホ.美シ森B
ヘ.代東
ト.新堤入
チ.広畑
リ.下小塙上ノ原
ヌ.天神原
ル.北門上
ヲ.合張
ワ.井出上ノ原
カ.植松
ヨ.南台
タ.毛萱
レ.毛萱館跡
ソ.真壁城
ツ.落合B
ネ.女迫
ナ.北原・日向
ラ.森ノ内B
ム.陣場沢
ウ.塚ノ越
キ.郡山五番
ノ.深谷B
オ.岩井迫
ク.大平山A横穴墓群
ヤ.植畑
マ.鹿屋敷

図６　双葉郡域の弥生時代中期後葉～後期前半土器出土遺跡分布

岸の中位～低位段丘上に立地している。ここでも天王山式が出土している。

双葉町域では、前田川下流右岸で海岸に近い丘陵地に楢原遺跡(60)、西田Ｂ遺跡(61)が前田川左岸の丘陵地に南迫遺跡(62)が所在する。いずれも標高30m、沖積地からの比高差10～20m程度の丘陵頂部に立地しており、天王山式と考えられる小片が出土している。

浪江町域では、朴迫Ｃ遺跡(63)、上ノ原遺跡(64)、原Ｂ遺跡(65)、本屋敷古墳群(66)の４遺跡が確認できる。朴迫Ｃ遺跡は、阿武隈高地東縁に近い請戸川右岸の標高80ｍ程度の丘陵頂部近くの斜面に立地する。段丘面からの比高差は25ｍを測る。天王山式と考えられる土器片

遺跡名
55. 北向
56. 波鏡院
62. 南迫
64. 上ノ原
65. 原B
66. 本屋敷古墳群
a.毛萱
b.真壁城
c.南沢A
d.郡山五番
e.鹿屋敷

図７　双葉郡域の弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉土器出土遺跡分布

が出土している。朴迫Ｃ遺跡と同一丘陵の東側先端付近で標高45ｍ程度の頂部平坦面には、上ノ原遺跡が立地する。上ノ原遺跡は、双葉群域では唯一弥生時代後期の前半と後半の土器群が確認できる。後期前半は天王山式、後期後半は明戸式・十王台式が出土しており、双葉郡内では珍しい継続期間の長い集落遺跡と推定されるが、発掘調査が行われていないため詳細は不明である。原Ｂ遺跡は、朴迫Ｃ遺跡の北側に下った標高38ｍの低位段丘上に立地し、明戸式の土器片が出土している。本屋敷古墳群は、請戸川下流左岸の標高20ｍ、沖積地からの比高差10ｍの丘陵頂部に立地し、平行沈線・櫛描文系土器群の最終段階の土器と考えられ本屋敷古墳群出土資料の類と北陸系の土器群が共伴している。

図６は、双葉郡域の弥生時代中期後葉と後期前半の遺跡分布を比較したものである。弥生時代中期後葉の双葉郡内は、天神原式と桜井式の分布圏が重なる地域である。弥生時代中期後葉の広野町域から楢葉町南部にかけての丘陵部には、天神原式を持つ遺跡が多数確認できるが、後期前半になると、この地域に遺跡が見られなくなる。楢葉町北部から浪江町域にかけては、桜井式と天神原式が混在する地域であるが、遺跡密度がまばらになり、中期後葉と後期前半土器が、同一遺跡で出土する事例が目立つ。中期～後期の土器が出土する場合、天神原式のみが出土する遺跡は無く、出土する場合は桜井が含まれる傾向が認められる。双葉郡内の弥生時代

表２　福島県弥生時代後期遺跡一覧（双葉郡）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
55	北向遺跡	楢葉町大字波倉字北向	丘陵頂部平坦面	46m	35m	散布地。土器片（明戸）出土。	馬目順一　1982『楢葉天神山原弥生遺蹟の研究』楢葉町教育委員会
56	波鏡院遺跡	楢葉町波倉字北向	詳細不明	詳細不明	詳細不明	集落跡？。土器片（明戸？）出土。	楢葉町教育委員会　1972『楢葉の歴史』上巻
57	本町西Ａ遺跡	富岡町大字本岡字本町西	段丘頂部平坦面	51～52m	20m	土器片（天王山？）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2002「本町西Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 32』福島県教育委員会
58	後作Ａ遺跡	富岡町大字上手岡字後作	段丘頂部から斜面	83～89m	10m	土器片（天王山？）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2003「後作Ａ遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 37』福島県教育委員会
59	道平遺跡	大熊町大字大川原字西平	低位～中位段丘頂部緩斜面	51～56m	0～2m	土器片（天王山）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2003「道平遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 37』福島県教育委員会
60	楢無遺跡	双葉町大字郡山字楢無	丘陵頂部付近	31m	10m	土器片（天王山？）1点出土。	大竹憲治　1996『細谷・郡山』双葉町教育委員会
61	西原Ｂ遺跡	双葉郡大字郡山字西原	丘陵頂部平坦面	35m	13m	土器片（天王山）1点出土。	大竹憲治　吉野高光・鯨岡勝成・鈴木 源　1999『標葉・西原Ｂ遺跡』双葉町教育委員会
62	南廻遺跡	双葉郡大字下羽鳥字南廻	丘陵頂部平坦面	31m	23m	土器片（天王山）少量出土。	大竹憲治　1994『双葉・南廻遺跡』双葉町教育委員会
63	朴廻Ｃ遺跡	浪江町大字室原字朴廻	丘陵頂部斜面	74～80m	25m	土器片（天王山）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2007「朴廻Ｃ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 50』福島県教育委員会
64	上ノ原遺跡	浪江町大字北字上ノ原	段丘頂部平坦面	43～46m	15～20m	集落跡？土器片（天王山・明戸・十王台）、紡錘車、アメ鏃出土。	福島県立博物館　2003『竹島コレクション考古図録第４集福島県相双地域の弥生時代跡』
65	原Ｂ遺跡	浪江町大字室原字原	低位段丘頂部平坦面	38m	10m	土器片（明戸）、アメ鏃出土。	㈶福島県文化振興事業団 2006「原Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 50』 2009「原Ｂ遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告 57』福島県教育委員会
66	本屋敷古墳群	浪江町大字北幾世橋字伊織迫	丘陵頂部平坦面	20～21m	10m	集落跡。住居３軒（北陸系・本屋敷古墳群）円形周溝状遺構１基、土坑１基。	法政大学文学部考古学研究室 1985『本屋敷古墳群の研究』法政大学

後期前半の土器群は、現在までのところ天王山式系であることから、その進出を巡って桜井式と因果関係があるかどうかが今後の課題と言えよう。

図７は、弥生時代後期後半と古墳時代前期の遺跡分布を比較した図である。現在までのところ、弥生時代後期後半の遺跡は、檜葉町北部と請戸川流域でしか確認できない。また、平行沈線・櫛描文系の土器群は、請戸川流域のみでの出土である。弥生時代から古墳時代へ継続した可能性のある遺跡は、本屋敷古墳群出土資料の類である弥生時代終末の土器群と北陸系の土器群が共伴した本屋敷古墳群のみであり、この遺跡を残した集団が次の段階で首長墓と考えられる本屋敷１号墳を設けるものと推定される。今後発掘調査事例が増えれば変わるかもしれないが、双葉町以南の地域は、弥生時代から古墳時代への継続が希薄な地域である。

５　相馬郡域の弥生時代後期遺跡とその分布

相馬郡は現在、飯舘村と新地町だけであるが、ここでは、南相馬市と相馬市も含めた明治期の郡制の範囲を対象とする。この地域の弥生時代後期の遺跡は、図８示したように22遺跡を確認した。大きく小高川流域、新田川流域、真野川中・下流域、真野川上流域、宇多川上流域、地蔵川流域、砂子田川流域に分かれる。

小高川流域では、横大道遺跡(67)、中島舘跡・仲沖遺跡(68)、君ヶ沢Ｂ遺跡(69)が確認できる。横大道遺跡は、小高川と飯崎川に挟まれた丘陵の一角に所在する。標高50ｍ、沖積地からの比高差２ｍの丘陵斜面に立地し、明戸式と考えられる土器の小片が出土している。中島舘跡・仲沖遺跡は、横大道遺跡の立地する丘陵の東端で、小高川と飯崎川の合流点にあたる標高10ｍ程度の沖積地に立地する。明戸式と十王台式が出土している。君ヶ沢Ｂ遺跡は、小高川支流の北鳩原川右岸の段丘頂部に立地する。標高50ｍ程度で、沖積地との比高差は10ｍである。明戸式の壺及び土器破片が出土している。

新田川流域は、さらに支流の笹部川流域と新田川下流域に分布が分かれる。笹部川は、太田川と新田川に挟まれた広大な段丘面上を流れており、その左岸に形成された標高70ｍ程度の中位段丘上に切付遺跡(70)、赤柴遺跡(71)が所在する。下位段丘面との比高差は、切付遺跡で１ｍ程度、赤柴遺跡では３ｍを測る。出土遺物は、切付遺跡が本屋敷古墳群出土資料の類、赤柴遺跡が明戸式で、後期後半でも新しい時期の所産と考えられる。新田川下流右岸では、標高13～15ｍ、沖積地からの比高差４～６ｍの中位段丘上に高見町Ｂ遺跡(72)、高見町Ａ遺跡(73)が所在する。高見町Ｂ遺跡では、本屋敷古墳群出土資料の類、高見町Ａ遺跡では、明戸式・十王台式・本屋敷古墳群出土資料の類・平窪諸荷遺跡出土資料の類が出土している。

真野川中下流域は、さらに海浜部の丘陵地と中流右岸の丘陵地に分布が分かれる。船沢Ａ遺跡(74)は、海岸部の丘陵地に所在する。標高30ｍ、沖積地からの比高差15ｍの丘陵頂部付近の斜面から天王山式の甕が出土している。真野川中流右岸の丘陵地には、高田古墳(75)、天神沢遺跡(76)、八幡林遺跡(77)が所在する。高田古墳・天神沢遺跡は、標高40～50ｍの丘陵頂部付近に占地し、沖積地からの比高差は、高田古墳で35ｍ、天神沢遺跡で20ｍを測る。出土遺物は、高田古墳が十王台式、天神沢遺跡が明戸式である。

真野川上流域では、真野川左岸の標高140～150ｍを測る段丘面に岩下Ｃ遺跡(78)、岩下Ａ遺跡(79)が所在する。真野川河床との比高差は、岩下Ｃ遺跡で２ｍ、岩下Ａ遺跡で５ｍ程度である。岩下Ｃ遺跡で天王山式、岩下Ａ遺跡では明戸式が出土している。

宇多川上流域では、標高278ｍの段丘頂部に荻平遺跡(80)が所在する。宇多川の左岸に位置し、河床面から20ｍの比高差がある。ここでも、天王山式が出土している。

地蔵川流域は、さらに地蔵川中流域、旧新沼浦沿岸、立田川流域に分布が分かれる。地蔵川中流域では、標高15～20ｍの沖積地に突き出した地蔵川右岸の低丘陵上に大坪字東畑地内(註3)(81)、左岸の低丘陵上に新城下遺跡(82)が所在する。沖積地との比高差は、大坪字東畑地内で３ｍ、新城下遺跡で７ｍを測る。遺物は、大坪字東畑地内が十王台式、新城下遺跡が明戸式と十王台式である。旧新沼浦沿岸には、大森Ａ遺跡(83)、南川尻Ａ遺跡(84)、師山遺跡(85)、双子遺跡(86)の４遺跡が所在する。大森Ａ遺跡・南川尻は、丘陵先端の裾部から低地部にかけて占地しており、標高・比高差ともに０ｍに近い。大森Ａ遺跡で天王山式、南川尻Ａ遺跡で明戸式の可能性のある小片が出土している。双子遺跡及び師山遺跡は、海岸地帯の標高10～15ｍの残丘上に立地しており、天王山式及び明戸式が出土しており、双子遺跡では十王台式も確認できる。立田川流域には、三貫地遺跡(87)が知られる。標高17ｍの低丘陵の裾部から天王山式の小片が出土している。

砂子田川流域では、標高70ｍ程の段丘頂部に赤柴遺跡(88)が所在する。南相馬市に同名の遺跡(71)があるが、こちらは新地町の赤柴遺跡である。沖積地からの比高差は５ｍを測り、明戸式と考えられる小片が出土している。

相馬郡内の弥生時代後期の遺跡を概観してきたが、次に弥生時代中期との関係を図９の分布図で見ていく。当該地域の中期後葉は、桜井式の分布圏となる。中島舘跡・仲沖遺跡と南入Ａ遺跡でのみ天神原式との接触が認められる。中期の遺跡は、太田川と真野川の間の丘陵地と旧新沼浦北部の丘陵に目に見えて集中するが、これは、相馬開発や原町火力発電所建設に関係する発掘調査と、竹島國基氏の遺跡踏査による偏りと見られる。ただし、分布密度の高い南相馬市域において顕著であるが、弥生時代後期後葉と後期前半土器が出土する遺跡が、船沢Ａ遺跡を除くと全くないという現象がある。また、地蔵川流域の遺跡群も中期が丘陵上に立地する場合が多いのに対し、後期前半は沖積地との比高差の少ない場所に立地する傾向が見て取れる。さらに、中期段階では認められない阿武隈高地への進出が、後期前半段階には始まっているのが興味深い。

弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡分布の状況は、図10に示した。弥生時代後期後半段階で標高の高い地域への遺跡の進出が認められたが、古墳時代前期前葉になると河川の中流域よりも海側に分布が偏り、低地部への進出がさらに進む。ただし、弥生時代後期から継続する遺跡はほとんど無い。例外的なのが、新田川中流右岸の高見町Ａ遺跡の周辺で、十王台式・本屋敷古墳群出土資料の類とともに、無文地の壺等、弥生時代終末期の土器群が出土しており、これらの遺跡を残した集団は、先に見てきた玉山古墳や本屋敷古墳群と同様、首長墓と考えられる桜井古墳を造営することになる集団の母体であったと推定される。

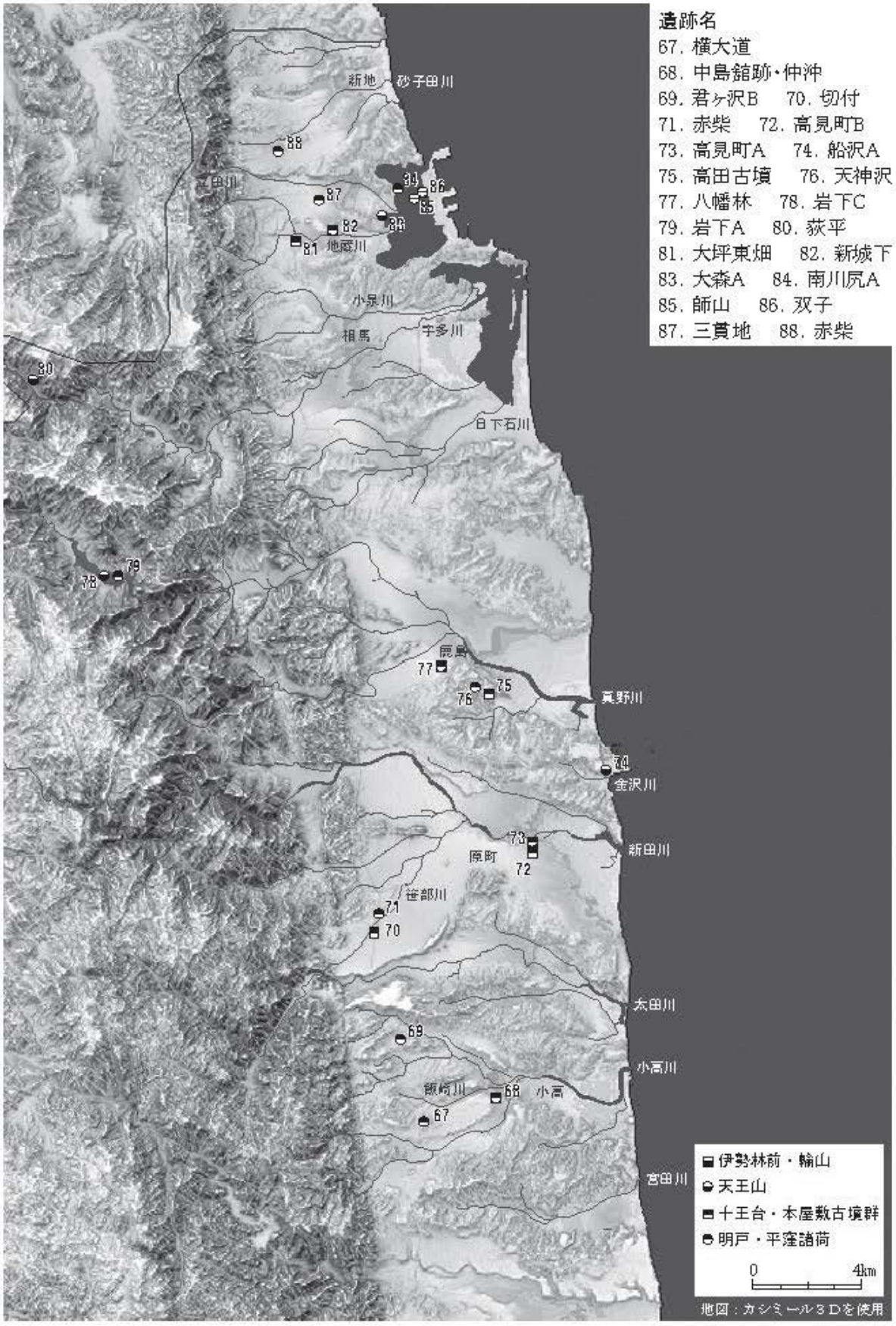


図８　相馬郡域の弥生時代後期土器出土遺跡分布

図９　相馬郡域の弥生時代中期後葉～後期前半土器出土遺跡分布

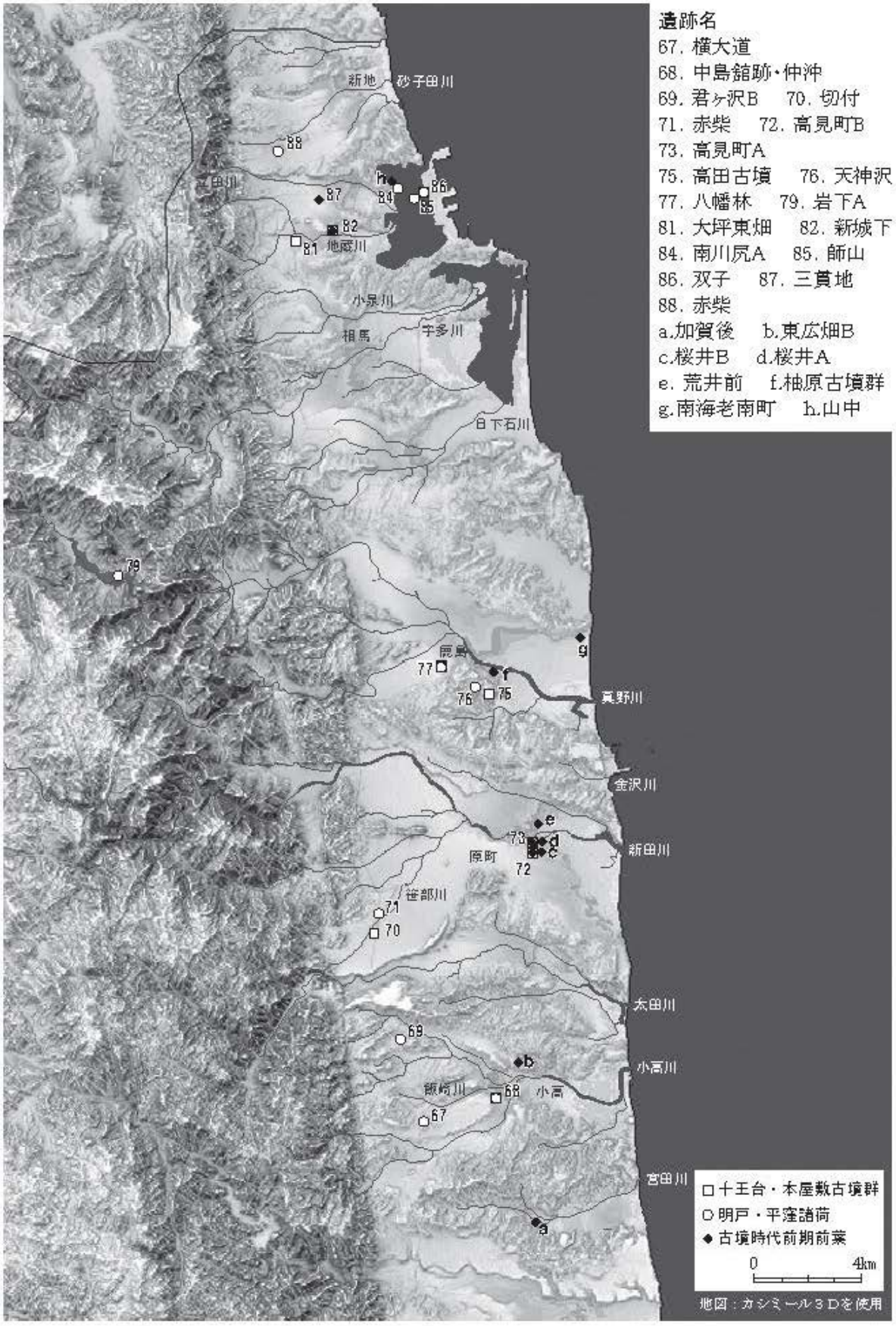


図 10　相馬郡域の弥生時代後期後半～古墳時代前期前葉土器出土遺跡分布

表３　福島県弥生時代後期遺跡一覧（相馬郡域１）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
67	横大道遺跡	南相馬市小高区大字飯崎字横大道	丘陵斜面	47～55m	2m	土器片（明戸）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2010「横大道遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 60』福島県教育委員会
68	中島舘跡・仲沖遺跡	南相馬市小高区飯崎字中島・仲沖	沖積地	9～10m	0m	集落跡？包含層（十王台・明戸）。有角石斧・紡錘車出土。	南相馬市教育委員会 2009「中島舘跡」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書 5』2018『中島舘跡・沖仲遺跡』
69	君ヶ沢Ｂ遺跡	南相馬市小高区大字羽倉字君ヶ沢	中位段丘頂部	50～54m	10m	包含層（明戸）。	㈶福島県文化振興事業団 2010「君ヶ沢Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 59』福島県教育委員会
70	切付遺跡	南相馬市原町区馬場字切付	中位段丘頂部平坦面	69m	1m	土器片（本屋敷古墳群）少数出土。	㈶福島県文化振興事業団 2008「切付遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 51』福島県教育委員会
71	赤柴遺跡	南相馬市原町区馬場字赤柴	中位段丘頂部平坦面～斜面	63～69m	0～3m	土器片（明戸）少量出土。	㈶福島県文化振興事業団 2011「赤柴遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 63』福島県教育委員会
72	高見町Ｂ遺跡	南相馬市原町区高見町一丁目	段丘頂部平坦面	15m	6m	集落跡。住居？（本屋敷古墳群）。	南相馬市教育委員会 2009「高見町Ｂ遺跡（2 次調）」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書 5』
73	高見町Ａ遺跡	南相馬市原町区高見町一丁目	段丘頂部平坦面	13m	4m	集落跡。住居跡 2 軒以上（明戸・十王台・本屋敷古墳群）、土坑。	東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・原町市教育委員会 1996『桜井高見Ａ遺跡発掘調査報告』
74	船沢Ａ遺跡	南相馬市原町区金沢字船沢	丘陵頂部付近斜面	25～34m	15m	包含層（天王山）。	㈶福島県文化センター 1991「船沢Ａ遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県教育委員会
75	高田古墳	南相馬市鹿島区江垂字高田	丘陵頂部	46m	35m	集落跡。住居跡 1 軒（十王台？）。	西戸純一 1995『高田古墳発掘調査報告書』鹿島町教育委員会
76	天神沢遺跡	南相馬市鹿島区江垂字天神沢	丘陵頂部～斜面	30～50m	20m	土器片（明戸）少量、紡錘車出土。	福島県立博物館 1983『竹島コレクション考古図録第 1 集 天神沢』
77	八幡林遺跡	南相馬市鹿島区寺内字八幡林	段丘頂部緩斜面	15～20m	2～5m	土器片（十王台・明戸）少数。	鹿島町史編纂委員会 1998『鹿島町史』第三巻 資料編 2 原始・古代・中世

表３　福島県弥生時代後期遺跡一覧（相馬郡域２）

	遺跡名	所在地	立地	標高	比高	内容	文献
78	岩下C遺跡	飯舘村大倉字岩下	段丘頂部緩斜面	152～153 m	1～2m	土器片（天王山）少数。	㈶福島県文化センター 1985「岩下Ｃ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』福島県教育委員会
79	岩下A遺跡	飯舘村大倉字岩下	段丘頂部平坦面	141～144m	5m	包含層（明戸）。	㈶福島県文化センター 1985「岩下Ａ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』 1988「岩下Ａ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』福島県教育委員会
80	荻平遺跡	相馬市山上字荻平	段丘頂部斜面	277～278 m	20 m	土器片（天王山）出土。	㈶福島県文化振興事業団 2009「荻平遺跡（２次調査）」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２』福島県教育委員会
81	大坪字東畑地内	相馬市大坪字東畑	低丘陵頂部平坦面	20 m	3 m	土器（十王台）出土。	長島雄一　1992「福島県相馬市大坪出土の弥生式土器」『籾』第２号
82	新城下遺跡	相馬市塚部字新城下	低丘陵頂部平坦面	15 m	7 m	土器片（明戸・十王台）、紡錘車出土。	福島県立博物館　2003『竹島コレクション考古図録第４集 福島県相双地域の弥生時代遺跡』
83	大森Ａ遺跡	相馬市長老内字大森	丘陵先端斜面	0～8m	0m	土器片（天王山）1点出土。	㈶福島県文化センター　1989「大森Ａ遺跡」『国道 113 号バイパス遺跡調査報告Ⅴ』福島県教育委員会
84	南川尻Ａ遺跡	新地町駒ヶ嶺字南川尻	丘陵裾部～低地部	0～1m	0m	土器片（明戸？）1点出土。	㈶福島県文化財センター 1990「南川尻Ａ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県教育委員会
85	師山遺跡	新地町駒ヶ嶺字師山	残丘頂部～斜面	1～15m	0m	集落跡。住居跡２軒（天王山・明戸）、包含層。	㈶福島県文化財センター 1990「師山遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県教育委員会
86	双子遺跡	新地町駒ヶ嶺字双子	残丘頂部～斜面	0～10m	0m	包含層（天王山・明戸・十王台）。	（財）福島県文化財センター 1990「双子遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』福島県教育委員会
87	三貫地遺跡	新地町駒ヶ嶺字木所内・三貫地南	低丘陵裾部緩斜面	17～23m	0m	土器片（天王山）少量出土。	渡辺一雄・大竹憲治　1980『三貫地遺跡　C地点調査報告　』新地町教育委員会
88	赤柴遺跡	新地町杉目字飯樋	段丘頂部緩斜面	70～72m	5m	土坑1基（明戸？）。	㈶福島県文化振興財団　2014「赤柴遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 68』福島県教育委員会

6　むすびにかえて

浜通り地方における弥生時代後期を中心とした遺跡立地と分布の変化を概観してきたが、全体をまとめると以下のようになる。

弥生時代中期後葉は、いわき市域の夏井川流域以北から楢葉町南部は天神原式の遺跡、南相馬市以北は桜井式の遺跡が分布し、楢葉町北部から浪江町域までは天神原式の遺跡と桜井式の遺跡が混在する。遺跡の立地は、概ね丘陵や段丘頂部である。

弥生時代後期前葉は、中期前葉段階で遺跡が希薄であった勿来・小名浜低地周辺部に平行沈線・櫛描文系の遺跡が分布し、夏井川中流域を中心とした丘陵地と双葉郡北部の丘陵地、地蔵川下流域、真野川上流域、宇多川上流域にまばらながらも天王山式系の遺跡が進出する。遺跡立地は、丘陵頂部も多いが、丘陵裾部や斜面もかなり多い。

弥生時代後期後半は、勿来・小名浜低地周辺、夏井川下流域、仁井田川下流域、請戸川中流域、新田川下流域、真野川中流域で平行沈線・櫛描文系の遺跡が主体となるのに対して、夏井川中流域、楢葉町北部、請戸川中流域、南相馬市～新地町の西部、旧新沼浦沿岸では天王山式系の遺跡が主体である。遺跡立地は、丘陵地も多いが、低地へ降り始める。

古墳時代前期前葉は、仁井田川中流域、請戸川下流域、新田川下流域の本屋敷古墳群出土資料の類及び北陸系の土器が出土する遺跡では、弥生時代後期後半から遺跡が継続する。ここを母体に首長墓が形成されるようである。それ以外の弥生時代後期の遺跡は、古墳時代まで継続しない。低地部への進出が目立ち、小名浜低地では豪族居館が営まれる。

以上、筆者の力不足でまとめきれていないが、図及び一覧表も含めて、今後の福島県における弥生時代研究の基礎資料としていただければ幸いである。

＜補　註＞

（註１）遺跡一覧作成後に『東日本弥生時代後期の土器編年』所収の根岸遺跡資料の存在を見落としていたことに気が付いた。このため、根岸遺跡の番号は、いわき市域の通し番号から飛んで、浜通り地方の最終番号となっている。

（註２）須賀蛭Ａ遺跡に代表させているが、出土遺物は、永山亘氏の須賀蛭遺跡踏査採集資料であるため、須賀蛭Ｂ・Ｃ遺跡にあたる範囲の資料も含まれる可能性がある。

（註３）相馬市の大坪字東畑地内は、遺跡として登録されていないため、以上の表記とした。

＜参考文献＞

佐藤祐輔　2015　「各地の弥生土器及び並行期土器群の研究７東北」『考古学調査ハンドブック 12　弥生土器』

鈴木正博　2002　「「十王台式」と「明戸式」　茨城県遺跡から観た「十王台１式」に並行する所謂「天王山系」土器群の実態　」『婆良岐考古』第 24 号

鈴木正博　2002　「「伊勢林前式」研究の漂流と救済の型式学　「土器ＤＮＡ関係基盤」から観た「伊勢林前式」並行の所謂「天王山系」土器群　」『茨城県考古学協会誌』第 14 号

中村五郎　1976　「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』

馬目順一　1982　「東北南部」『弥生土器Ⅱ』